

令和7年度 奈良市立伏見保育園 研究実践概要

園長名 近藤 美子
全園児数 189名

1. 研究主題

「やってみようかな」「やってみよう」と思える気持ちを育てるために
～心を育てる遊びや環境を探る～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

「やりたい」「やってみよう」と思える主体性を育む遊びの環境や援助のあり方の研究に取り組み、「おもしろそう」「やってみよう」と興味をもって遊びや活動に意欲的に取り組む姿が見られるようになってきた。一方、子どもの中には「やってもできない」と自信がなく、やろうとしなかったり、苦手意識をもつなどやる前からあきらめたりする姿があった。遊びや活動に取り組みにくい子が「やってもできない」という気持ちから「やってみようかな」と思えるようになるには保育者のどのような関わりが必要なのか、保育者間で話し合い、主体性を高める自尊心の育み方を探りたいと思い主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

「やってみようかな」と一歩踏み出す思いを育てるために、心を育てる遊びや環境、保育者の関わりを探る。

②研究の重点

- ・乳幼児の子どもの自尊心を育むために、保育者がどのような関わりができるのかを職員間で月に一度研究主題会議の中で話し合い、共通理解を図りながら一人一人の思いに応じた環境や援助の仕方と探る。
- ・子どもが遊ぶ中で心動かされている場面を捉え、それに応じた環境構成や援助のあり方について考える。
- ・子どもが「やってみようかな」と思いを育めるような遊びや活動の工夫を探る。

③活動の方法

【0歳児「マットのお山」12月】

歩けることが嬉しくて探索活動が活発な子ども達だが、不安定でこけやすかったりスプーンを握る手に力が入りにくかったりする姿がある。その姿から体幹育てとしてマットの山やトンネルを用意しハイハイをたくさんできる環境を整えた。楽しんで参加する子がいる反面、遠くから見つめて慎重な様子の子や興味を示さない子もいた。保育者がマットに登って滑ることを全力で楽しんだり、遊んでいる他児に「登れたね!」「しゅー!できたね!」と関わったりすることで少しずつ興味をもち、最後には全員が遊ぶことができた。一度遊ぶことで楽しさを感じ、何度も登り降りする姿が見られた。後日も遊び続けると保育者が共に楽しむことで“やりたい”と意欲をもって遊んでいる。



<評価・反省>

保育者自身がマットに登って全身で滑り、全力で楽しむことで慎重な子や興味を示さない子も

少しずつ興味を示し参加することができた。0歳児にとって一番身近で安心できる保育者が楽しむ姿を見ることで、安心だと分かったり魅力的に感じたりできる要因となったと考える。また、遊んでいる子に対して共感や認める声掛けを大切にしたこと、遊びに来ていない子に対しては見守りながらも参加した時には「できたね、楽しいね!」と安心できる関わりをもてたことが、後日も“やりたい”と思える意欲になった。“やってみようかな”と思える環境や関わりに加え、やってみた後のさりげない援助や「できたね!」の共感や認める関わりが更に次の“やってみようかな”に繋がった。山の高さを変える・デコボコ道をハイハイするなど遊びを次のステップへつなげながらも、子ども達の意欲を引き出し、安心できる関わりを大切にしていきたい。

【1歳児「一緒にすると楽しいね」9月】

砂や泥など感触遊びに苦手感のあるA児。保育者と1対1でじっくり遊ぶことで少しずつ抵抗もなくなり、楽しむ姿が増えてきた。指絵の具を使って画用紙に絵の具を塗る遊びをしたところ、A児は友達が指に絵の具をつけて線を描くことを喜んでいる姿に興味を示したが遠くからじっと見ていた。よく同じ遊びをしているB児が楽しんでいる時に、「一緒にしてみる?」とさりげなく誘いかけると、「うん!」と嬉しそうに駆け寄り同じ机に座った。青・黄色・ピンクの3色ある絵の具の皿から自分達で好きな色を選べるようにしていた。指につく絵の具の感触に苦手意識があるのではと思い、あえて3つの皿のうちA児の好きな青色の指絵の具をそっと前に置いたところ「あお!」と嬉しそうに青色を見つけたA児は自ら指につけて塗ることを楽しみ始めた。



<評価・反省>

子どもが初めての遊びを経験する時、不安だな嫌だなという思いがある中で、「やってみようかな」「やってみて楽しかったな!」という気持ちをもてるよう“初めの一歩”をそっと背中を押せるように職員間では穏やかな雰囲気や大事にし、一人一人の姿やペースに合わせて温かく見守り、子どもが主体的に動けるまで見守るようにしていった。春から育児担当制で保育者との1対1での関わりを日頃から大切にしてきたことから、子ども達の好き嫌い、苦手がわかり、担任間でその姿を共有することや話し合いを継続して行ってきた。一対一でじっくりと保育者と遊ぶきっかけから少しずつ感触遊びや汚れることへの抵抗感が薄まり、友達がしている遊びを見て“やってみよう”と思えることにつながった。汚れてもすぐに落ちる絵の具や好きな色を準備するなどの物的環境、大好きな友達や安心できる人的環境の大切さを改めて感じた。好きな友達ができてきた今、子ども同士の関わりを多くもてる機会を増やし、楽しい経験を通して遊びの輪を広げていきたい。

【2歳児「わたしもできたよ!」9月】

春から継続しているサーキット遊び。室内、園庭問わず子ども達が大好きな遊びである。この日も「もっと台を高くして!(ジャンプする台を)」「もういっかいしよう」と言って楽しむ姿があった。そこに慎重派のA児がやってきて、参加はせず友達の様子を見て立っていた。A児も挑戦できるようにと、以前経験した事のある用具を出し、巧技台の高さを低くして『簡単コース』を設置してみた。保育者が「Aちゃんもしよう」と誘ったが「こわいからしないよ～」と去ろうとした。その時B児が「Aちゃん一緒にやろう!」と誘いにきた。B児に誘ってもらったことをきっかけにA児は『Bちゃんもやっているし自分にもできるかも』とサーキットの前まで行き、挑戦することができた。平均台は少し怖い様だったが、保育者が手を繋ぐことでゴールまで行くことができた。「できる!」と分かったA児は2回目からは保育者の手を借りずに何度も何度も挑戦し、片付けの時間になるまで繰り返し遊び楽しむ姿があった。



<評価・反省>

サーキットを怖がっていたA児だが、保育者がA児もきつとできるはずと信じ、経験したことのある用具を出したり簡単なコースをつくったりしたことで、少し興味をもつことができた。子ども達の興味・関心を逃さずに捉え、適宜に環境を変えたり、設定しなおしたりすることが大事だと分かった。また、保育者だけではなく大好きな友達に誘ってもらったことが「Bちゃん楽しそうだな。自分にもできそう。やってみよう！」と思えるきっかけになったと考える。『できたことがうれしく、楽しいな』という思いが、片付けになるまで繰り返し遊ぶ姿に表れていると感じた。これからも日頃から一人一人の子どもの様子を見取り、ここまでならできるはずだと信じ、挑戦しようとする気持ちを応援していくことで、出来た嬉しさを存分に味わい自信へとつなげていきたい。

【3歳児「相撲対決」10月】

夏頃から体幹を育めるように相撲を活動の中に取り入れていた。A児は相撲対決で負けることが続き、土俵に立つことをためらっていた。クラスで折り紙が人気で部屋での遊びに「紙相撲」を取り入れることにした。折り紙が得意な児はすぐに作り方を覚えた様子で、保育者が「もう覚えたの？」と聞くと「うん！！」と嬉しそうA児に答えた。他児から「これはどうするの？」と聞かれA児が作り方を教えていると、「Aちゃん人気者やな！！」とB児に言われ、照れ笑いをしていた。

別の日に相撲対決をすると、以前は自信が無く土俵に立つことをためらっていたA児が、やる気満々でジャンプをして土俵に向かうまで自信を取り戻し、その後負けても笑顔で土俵を後にしていた。



<評価・反省>

A児の得意なことを活かし、それを保育者や友達に認めてもらうことで苦手意識を克服し、自分に自信を持つことができた。保育者だけでなく友達からも認めてもらう経験が折り紙と相撲という直接関係がなくても「頑張ってみよう！」という意欲につなげることができた。サークルタイム時などの一斉活動で頑張りを知らせたり、個別に伝えたりし、勝ち負けやできる、できないに関わらず頑張る姿を認めることで「やってみよう」と思える気持ちを引き出していききたい。

【4歳児「前回り、やってみようかな。」10～12月】

10月の体操教室で講師から「できる！できる！できる！」「失敗は良いこと！」「最後まで諦めない！」という合い言葉を教えてもらい、子ども達は日常でも口にするようになった。11月の発表会に向けた劇遊びでは、鉄棒を取り入れたが、A児は前回りに苦手意識があり「できないから」と自信をもてずにいた。活動として鉄棒遊びを行った際、A児は参加しようとはせずホールの隅で友達の様子を見ていた。そこで保育者が音楽好きのA児に「好きな音楽が流れている間だけ挑戦してみる？」と提案した。順番を待つ間も不安な言葉が聞かれたため、友達が前回りをする様子に目を向けられるよう声をかけた。A児の番になり、「2人の先生で支えるからやってみる？」と声をかけると、やってみようとするものの、前へ回る恐怖心が拭えず、直前で嫌がる姿があった。そこで、「できる！できる！できる！」と合い言葉を保育者が言うと、それを聞いていた周りの友達も続けて合言葉を言って励ます姿があった。みんなからの励ましで鉄棒に手をかけたA児。「ツバメ→布団→回る」など動きの流れに合わせて保育者が細かく言葉にするなどして声をかけ続けると、支えられながら前回りをする事ができた。回り終えた瞬間、A児が「できた！！」と喜ぶ姿が見られた。その後A児は「鉄棒がしたい」と自ら言うようになり、発表会当日には自信をもって取り組むことができた。



<評価・反省>

意欲的に取り組む子や自信がもちにくい子、様々な子ども達がいる中で、一人一人の気持ちや

ペースに寄り添って安心して挑戦できる環境づくりを行い、丁寧に関わることが「やってみようかな」という姿につながった。また、日頃から友達や年長児の姿に目を向けられるような声かけを通して、興味を持ったり刺激を受けたりできるようにすることや、興味を示したタイミングを逃さず援助することが大切であると感じた。励ましや挑戦しようとする過程を認めることで気持ちを育て、何度も挑戦しようとする姿やできた喜びに共感することで自信に繋げて、何事もまず「やってみよう」とする気持ちをもてるようになってほしい。

【5歳児「ドッジしよう！」10～12月】

ドッジボールをクラスで楽しみ、好きな遊びの時間にも子ども同士で遊んでいた。最初はトラブルも多く仲立ちが必要だったが、徐々に子ども同士で相談し、遊びを進められるようになってきた。その中でA児は、当てられると悔しくて泣いたり、怒って遊びをやめたりしてしまうことが続いた。そこで保育者が中当てに誘い、何度も逃げたり当てたり、役割を交代することを楽しめるようにした。投げる、避ける等の一つ一つの動作を褒めたり、“当たってもまた入れる”という見通しをもてるように関わったりすることで、笑顔で遊びを続けるようになった。また、その様子に興味をもって加わった友達が、投げるコツを教えてくれる姿も見られた。「楽しい」「できた」という経験をすることで自信をもち、当たってもあきらめずにやってみようとするようになり、ドッジボールでも友達と一緒に生き生きと遊ぶ姿が増えていった。



<評価・反省>

学年としてドッジボールに取り組む中で、自分たちで話し合い、遊びを進める力が育った。遊びが続きにくい子には、保育者が中当て、キャッチボール等に誘い少人数で遊びを進めた。子どもの様子に合わせて援助していくことでルールを理解し見通しをもって遊びを続けることができ、「できた」という喜びを感じることもできた。また、友達から受ける刺激、保育者や友達から認められて生まれる自信が「やってみよう」という気持ちにつながった。就学後もたくさんの「やってみよう」とことを見つけ、自分なりの目標をもって様々なことに挑戦して行ってほしい。

5. 研究の成果

0歳児から5歳児まで、年齢や発達の違いがあっても「やってみようかな」という気持ちを育てるためには日頃から一人一人の子どもの姿を丁寧に見取り、安心できる環境の中でその子に応じた援助や関わりを行うことが大切であるとわかった。また、遊びたいけど自信がなく、苦手意識からあきらめている姿に対して「どうしたら興味をもってくれるかな」「どうしたらやろうという思いをもってくれるかな」保育者がその時の子どもの思いをよく理解した上で援助やアプローチを工夫することで「やってみようかな」と思えるきっかけに繋がることわかった。

6. 今後の課題

・月に1度研究主題会議を行い、子どもの姿や遊びや活動の様子を伝え合う中で子どもの「やってみようかな」という思いを育むためにはどのような遊びや環境の工夫、保育者の援助が必要であるかを話し合ってきた。子どもの姿を丁寧に見取り、心が動く瞬間を見逃さず、自ら「やってみようかな」と主体的に遊びや活動に取り組めるような人的環境、物的環境の在り方についてさらに学びを深めていきたい。

・友達や年長児へのあこがれから挑戦する思いにつながるように、異年齢児と交流ができる機会をもち、安心して取り組める言葉掛けや環境設定を工夫することで「やってみよう」と意欲をもって遊びや活動に取り組めるようにしていきたい。